

基本を大切に



何事も基本が大切と言います。基本がしっかり出来ていれば、応用が利くに違いないからです。しかし基本とは一体何かと考えると、その答えは簡単には見出せないようです。

例えばピアノを弾くとき、ハノンなどの指を動かす練習が基本に相当するのは分かりやすいですね。では臨床医の基本は何か。患者を診療するための知識や技術と考えるのが一般的ではないでしょうか。私も医師になって、ひたすら診断法や治療法などに力をいれて学んできました。ところが、これまで基本と思っていたこれらのことが実はそうではなく、本当の基本は別にあると気づかせてくれたエピソードがあります。

奈良を撮り続けたプロの写真家と言えば、入江泰吉と土門拳のお二人の名前が挙がるでしょう。入江さんは長らく奈良に居を構えて、奈良の生活の隅々までを知り尽くし、だからこそ気づくことが出来た題材を作品に残しました。写真が芸術のひとつとは思えないと主張する妻を、入江さんの作品の本拠地である奈良市写真美術館に連れていったことがあります。数々の写真を目の当たりにした妻は、神々しい雰囲気や威圧感のある作品群に、感動のあまり言葉を失ったほどでした。一方の土門さんは、人物像や子供たちの風景を得意とした写真家ですが、仏像写真にもエネルギーを注いでいた方です。仏像の一部分に焦点を当てるなど、奇抜な構成の写真が残されています。入江作品に比べるとちょっと理屈っぽく突っ張っている感じのする作品ですが、むしろその点が高い芸術性として評価されており、人々の感動を呼び起こしています。

同時代に活躍されたお二人は、同じ仏像を撮影しても写真の雰囲気は対照的です。しかし、お二人で一致している点の一つありました。それはお二人とも写真を取る前に、膨大な資料に目を通していたという点です。その努力については、彼らの奥様が全く別々に証言していますが、内容が一致しているのには驚かされます。彼らは古本屋巡りなどでとにかく多くの資料を入手して勉強しており、税務署には「もう少し採算の取れる仕事をしたらどうですか」などと、情けの行政指導を受けたりしたそうです。彼らの妥協を許さない職業意識は、確かに撮影した写真に反映されているように感じます。恐らく奈良や仏像の根底に宿っている精神をそこまで

研究していたからこそ、まぶたに浮かびあがる真実の姿を、フィルム上に具現化できたのでしょう。写真の専門家ではない彼らの奥様にも、「奈良を撮影するためには、勉強しないと無理ですものね」と言わしめたお二人の職人魂は、刹那に存在した対象物の姿を偶然の時の流れの中で撮影したのではなく、積極的に身ぐるみはがして、ファインダーを通してその中心をなす本質に迫ったのです。

写真撮影に疎い私には、写真を取るための基本は、カメラなどの機材の扱い方にあると思っていました。例えばシャッタースピード、露出の加減、照明法などの技術を身に着けることで、そこから匠の技が発揮されると思っていました。プロの写真家が、まさかそこまでのめり込んで撮影対象を研究しているとは、想像すらしていませんでした。考えてみれば、写真家が撮影技術を身に着けるのは当たり前のこと。彼らにとっての基本はそこにはなく、撮影する対象物と対峙する姿勢にあると言われれば、なるほどと納得させられます。素人目には、一見すると作品づくりに向かって遠回りし過ぎているくらいの職業意識が、仕事の出来栄を左右する重要な分岐点になっているのだと思いました。

医師になって25年、医療の基本が手薄だったことに初めて気づかされました。これまでは病気の知識や検査法、治療法などを論文を読んだり学会に学んだり、興味の対象は科学データや医療技術ばかりに終始していました。確かにこれらも大切ではありますが、それで十分だと勘違いしていたのです。入江、土門両氏の職業に対する真摯な態度を学ぶに至り、医師の基本は医療技術を云々する以前に、その土地の風土、文化、慣習などを学ぶこと、多くの患者が日本人であるならばその精神史を学ぶこと、それが日本で診療するかぎり不可欠の医師の基本に思っています。古事記・日本書紀が表す神代の遙か以前から、この土地と時の流れの中で育まれてきた日本の感性を研究することなく、「まだまだ値が高い」とか「体重を減らせ」など、うわべの数値だけに固執した実証主義的態度に凝り固まるのでは、全く医療の態を為していなかったと、深く反省させられました。

外科には国境はないかもしれませんが、内科には歴然とした国境があるというのが持論です。自分の専門は和の医療ですと自信を持って言えるようになることが、私の目標です。